

進路学習、小論文学習をリンクさせる

進路学習で体験したり学んだりした知識を基に、自分の考えを筋道立てて論述し、文章に表すことは、知識相互の関係を深く理解し、統合化させる上で極めて有効である。したがって、進路学習と小論文学習の融合は、「総合的な学習の時間」における取り組みの主流の一つになると考えられる。ここでは、具体的な指導シナリオを例に考える。

文部省は「総合的な学習の時間」(以下「総合的な学習」)の具体的な学習活動例として三つ(横断的・総合的な学習)を設定した課題についての知識や技能の深化・総合化を図る学習、生き方や進路を考える学習(を挙げている。既に多くの高校が、自己発見から進路先の決定までを「自己の生き方」から考えさせる進路指導に積極的に取り組んでいる。また、最近の国公私立大後期日程試験やAO入試への対策、さらに「自己と社会の関わりを考えさせる」という観点で小論文学習を取り入れている

高校も多い。そのため、進路学習と小論文学習は「総合的な学習」の中の一要素として比較的導入しやすい環境にあると言えよう。

では、従来の進路学習、小論文学習と「総合的な学習」の中でのそれらの取り組みでは、何がどのように変わってくるのだろうか。ここでは、「社会問題と自分の関わりを考える中で、将来の進路を描いてみる」を学習目標に設定した取り組みを例に、指導の進め方を考察してみたい。

具体的な取り組みの概要と学習目標

社会問題に対する高校生の認識と行動レベル (%)

キーワード	よくする	たまにする	どちらとも言えない	あまりしない	全くしない
知る	33.7	44.2	10.9	9.0	2.1
話す	11.6	38.4	20.4	21.3	8.4
調べる	1.8	7.1	18.7	36.6	35.8
考える	2.7	14.5	30.1	32.9	19.8
行動	1.9	11.6	30.2	34.4	21.9

高校生は社会問題に対して関心や知識を持っているが、それが自ら調べて考えた行動することにつながっていない。生徒が自ら課題として取り組み姿勢や能力を育てることが、「総合的な学習の時間」のポイントになってくだろう。

ベネッセ文教総研「高等学校における「総合的な学習の時間」の課題と展望」(1999年刊)より

(大字)としては次のようなものが考えられる。

現代社会が抱える様々な課題(環境、国際、情報、福祉などの現代的な課題)を生徒に提示し、自分の身の周りでその問題が起きたらどんな対応をするか、その解決のために自分ならどんな行動をとるか考えさせる。これにより、その問題を生徒自身に引き寄せて考えさせる。生徒が主体的に取り組みするための動機付けを行う。

その社会問題に対してどのような解決策があるかを考えさせる。生徒に調べさせたり、生徒同士で議論させていくことによって考えを深めていく。課題発見力、課題解決力を育成する。

その問題に対する様々な立場の人の意見、賛否両論を知り吸収することにより、自分の意見を軌道修正し、意見を表出させる。多様な価値観が存在すること、多角的なものを見方があることを理解させ、それを基によりよい解決の糸口を見出す力を養う。

その社会問題の解決に貢献できる職業や学問にどんなものがあるかを

考えさせる。狭い価値観に捕らわれず、社会とどのような関わりを持つて生きていきたいかを考えさせる

目標を理解させ 生徒自身にテーマを設定させる

このような取り組みと学習目標を達成するための指導シナリオの一例として、次のような七つのプロセスを想定してみた。

1 学習内容の理解を 求めるオリエン

学習活動の目的を 生徒に理解させ、 主体的な取り組みを促す

いわゆる「調べ学習」的な進路学習では、生徒は自分の興味のある職業や学問を調べていくが、社会的に早急な解決が求められている重要な課題などを踏まえ、広い視野に立たせて、今は興味がない職業、学問にも生徒の目を向けさせることが重要である。

そこで、学年集会などを活用したオリエンテーションなどの場でその学習

目標とそこに至る学習の流れを生徒に伝えることが必要になるだろう。そしてこの際、特に「なぜこのよう取り組みをするのか、その意義は何か」という点を確実に生徒に理解させるように留意したい。

(指導案)

まず、生徒に社会問題に目を向ける必要性を訴えたい。環境破壊や国際化、科学技術の発展と人間など、現代社会を読み解くキーワードを挙げながら社会が日々どのくらい変動しているかを具体的な事件・事故などを通して紹介する。生徒は「世の中はこんなに大きく動いているんだ」と実感できるだろう。

現代社会のキーワードは、『日本の論点(文藝春秋)』や新聞記事などを基に話そう。『進路学習ノート』に「社会問題からきみの進路を考えてみよう」(職業編・学問編)と

H7 社会問題からきみの進路を考えてみよう(職業編)

4 ゴミ問題の責任はだれがとる? 消費社会と企業責任

なにが問題なのか?

日本では年間出るゴミの量は約4億6000万トン。これは、約3分間に約1000トンの量です。ゴミ問題に対する国民の関心は、今や急激な高まりを見せています。しかし、それではゴミ問題の解決にはまだ足りない状況です。ゴミの削減やリサイクルの推進が求められています。また、このように企業も責任をもち、環境にやさしい製品の開発や、リサイクルの推進に貢献する必要があります。

ゴミの削減やリサイクルの推進が求められています。また、このように企業も責任をもち、環境にやさしい製品の開発や、リサイクルの推進に貢献する必要があります。

燃焼 45.0% 資源物 35.0% 埋立 15.0% 未燃焼 5.0%

H8 社会問題からきみの進路を考えてみよう(職業編)

ゴミの企業責任に関する二つの意見

意見1: ゴミ処理費用は企業が負担すべき

意見2: 生分解性プラスチックの可能性に期待

生分解性プラスチックの可能性に期待

プラスチックは便利で、広く使用されています。しかし、その廃棄は大きな問題です。生分解性プラスチックは、微生物によって分解されるため、環境にやさしいとされています。しかし、そのコストは高く、普及にはまだ時間がかかります。

「進路プランニング」の『進路学習ノート』では、社会全体で議論されている具体的な問題を題材に、その問題の概要、その問題に対する2人の識者の異なる意見などを生徒に読ませ、自分の意見を記入させていく。問題のアウトラインをつかみ、他の価値観に触れることで、生徒は段階を追って自分の考えを発展させることができる。

いくつかのページがある。ここでは、社会問題の概要を示し、さらにその問題に対する多様な意見を高校生にも分かり易く紹介している。このようなものを教材として活用する方法もある。

また社会の変動同様に、最近はその中で求められる人材像も変わってきていることを生徒に理解させることも重要だろう。変貌する人材像について生徒に話す際には、企業のエントリーシートなどの例を上げていくと具体的にイメージしやすい。そして、明確な目的意識を持った、かつ課題発見能力や課題解決能力を持った人材がどつかが採用段階でチェックされていることを生徒に指摘していきたい。

現代社会のキーワードと具体的な課題例	
環境	ゴミを減らすために何をすべきか リサイクル社会に向けて何をすべきか 開発と環境保全は両立するの
情報	インターネット犯罪をどう防ぐのか 情報化社会でプライバシーは守れるのか テレビゲームは子どもに悪影響を与えるのか
福祉	介護保険制度の問題点は何か ボランティア活動は日本に浸透するのか バリアフリー社会への課題は何か
科学技術の発展と人間	脳死臓器移植は日本人に受け入れられるのか 原子力発電所は必要なのか クローン研究は推進すべきか

社会問題について調べさせる項目

- ・その問題の概要
- ・何が原因でその問題が起こったか
- ・その問題を解決できる手段は何か、現在の自分で考えつく解決策は何か
- ・その問題に対してどんな意見があるか
- ・その問題について今疑問に思っていること、今後調べてみたいことは何か

学習テーマとなる具体的な社会問題は一つだけに絞らず、複数の社会問題を用意したい。環境、国際、情報、福祉

この取り組みでは、多様な価値観を理解する力を養うことが学習目標の一つである。そのため、グループ学習という形態は非常に効果的だ。クラスの中で同じテーマに関心を持つ生徒同士をグループにし、お互いが意見を率直に述べながら学び合うことは、生徒にとって他者の価値観に触れ、社会問題を題材に相互理解を深めるよい機会になりうる。

2 グループ分けと学習テーマの設定

生徒の興味の方向性を明らかにする

社などさまざまな分野から複数のテーマが挙がっている場合、その中で自分が興味を持っていること、深く考えたいことはなんだろう、と生徒は改めて考えることができる。

また、教師があまり詳細にテーマを設定せずに、各グループごとに生徒たちに決めさせてみるのもよい。教師はキーワードレベルのテーマを設定し（例えば、環境や福祉といったレベル）、生徒に詳細なテーマ（例えば、「地球温暖化をくい止めるには？」、「ゴミの不法投棄はなぜなくならないか？」など）を設定させる。

（指導案）

生徒にテーマを決めさせる場合は、進路学習との融合を考えて、なるべく文系、理系どちらの職業（学問）にも結び付くものが望ましい。例えば、「ゴミの不法投棄問題」なら文系から政治家、ジャーナリスト、地方公務員、弁護士、理系から化学系研究・技術者、機械系研究・技術者などが、その問題の解決に貢献できる職業として挙げられる。

生徒だけでは、そういったテーマをうまく設定できないことも多いので、教師は複数のテーマを用意しておき、適当なテーマを設定できないグループに提示してやることも必要になるだろう。

3 社会問題に関する知識の修得

様々なツールを用いた社会問題に対する理解を深める

どんなテーマを選んだとしても、それについての知識がないと、その後の活動はスムーズに展開しない。生徒にはテーマについての理解を深めるために、まずインターネットや新聞記事、書籍などを活用して調べ学習に取り組みさせる。特に、情報リテラシーを身に付けさせることも目的としている場合は、インターネットの活用は有効だ。つまり「環境問題についてインターネットで検索してみよう」といった、漠然とした目的の情報収集ではなく、ここでは「ゴミの不法投棄問題はどれくらい起きているか」といった具体的な目的での情報収集のため、集めた情報の要、不要の基準も明確に打ち出せる。その分、たくさん情報の中から自分にとって必要なものを見極めるという情報リテラシー育成の場としてふさわしいと言える。

（指導案）

調べた内容はグループごとにレポートに

4 グループワークの活用

多様な価値観との出会い、理解をさらに深める

多様な価値観があることを認識したり、それを受け入れ自分で咀嚼し、よりよい解決の方向性を提案できる力を養うためには、3の後にブレインストーミング法やKJ法、デイベートなどのグループワークを活用するとよい。

（指導案）

ブレインストーミング法 一つの議題について話し合える（1987年、中央公

まとめさせ、発表する場を設けたい。発表の場とは、自分たちが発表する場であると同時に、他のグループの発表を聞く場でもある。自分の設定したテーマ以外のことを知る機会があればあるほど、生徒にとって社会に対する理解を深めるチャンスが広がることになる。例えば、ゴミの不法投棄をテーマにした生徒は「インターネット犯罪」「脳死臓器移植」といったテーマの発表を聞

ブレインストーミング法

ブレインストーミング法では、1)出された意見への批判、反論はしない 2)自由に発想して、たくさん意見を出す 3)他人のアイデアをアレンジしてもよい 4)三つのルールがある。このルールを説明することで、自由に意見を出し合い、発想を膨らませていくことが大切であることを生徒に理解させてから、ディスカッションに取り組みさせる。

テーマ例「インターネット犯罪」	
授業の基本的な流れ	「インターネット犯罪」についてブレインストーミングで考えさせる
クラスを5、6人程度のグループに分け、司会と書記を決め、議題に関して自由に意見を発表させる。	<p>インターネットのよいところ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界の情報を居ながら見ることができる ・いろんな人とメールの交換ができる ・家庭に居ながら国際的な交流が可能 ・テレビや雑誌より情報量が多い ・買い物もできる ・24時間いつでも見られる ・こちらから発信できる <p>インターネットの悪いところ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他人を誹謗中傷するような情報が流れている ・有害なサイトも少なくない ・情報に信憑性がない ・機械が苦手な人には使いにくい ・詐欺などのトラブルが起こっている ・相手の顔が見えないから無責任な発言をしてしまう

ブレインストーミングの結果を踏まえて、インターネットのよいところを今後社会のどのような分野で活用していくべきか、また、悪いところについてどのような対策が考えられるか、といったテーマでレポートを書かせる。

KJ法

数人のグループで、各々がカードに議題について意見を書き込み、そのカードを机の上に広げる。グループ全員で似たもの、関係の深いもの同士を取り出してまとめ、そのカードの束に表札を付けていく。表札にはそのカードの束の特徴を示すタイトルを書き込む。漠然とした、答えがはっきりと見えない議題を考えたときに特に有効とされる。

テーマ例「ゴミを減らすにはどうしたらよいか」

授業の基本的な流れ		「ゴミを減らすにはどうしたらよいか」を考えさせる場合
1)ゴミ問題に関する文章、資料を調べさせる。	1)ゴミ問題についての文章、識者の意見を読ませ、自分はどう思うか考えさせる。	
2)クラスを4人程度のグループに分け、クラス全体にKJ法の説明をする。担任が議題を決める。	2)議題「ゴミの増える理由を整理し、その解決法を考える」	
3)議題について、何が問題なのかを明らかにするため、生徒それぞれに問題だと思っていることすべてを、できるだけ具体的に、簡潔にカードに書かせる。そして、それぞれのグループでカードを机の上に広げさせる。	ゴミの増える理由について考えさせる	<ul style="list-style-type: none"> ・使えるのにすぐ捨ててしまう ・ペットボトルが増えた ・皆がゴミの分別に協力しない ・ゴミの埋立地が不足している ・エコ商品は高い ・容器がゴミのもとになる ・食べ残しが多い ・買い物袋を持っていく人が少ない ・本や雑誌を回収してくれる機会が少ない ・焼却場が少ない ・余計な包み紙が多い ・回収・再利用にお金がかかる ・再利用できるものを回収する場所が少ない ・詰め替えてできる商品が少ない
4)カードを、似たもの同士、関係の深いもの同士でまとめて束にする。カード束のそれぞれに表札をつけ、タイトルを書いてクリップでとめる。	各家庭での努力不足	<ul style="list-style-type: none"> ・使えるのにすぐ捨ててしまう ・食べ残しが多い ・皆がゴミの分別に協力しない ・買い物袋を持っていく人が少ない リサイクル制度が不十分 ・回収・再利用にお金がかかる ・本や雑誌を回収してくれる機会が少ない 企業の努力不足 ・ペットボトルが増えた ・エコ商品は高い ・容器がゴミのもとになる ・詰め替えてできる商品が少ない ゴミ処理施設などの不備 ・焼却場が少ない ・ゴミの埋立地が不足している ・再利用できるものを回収する場所が少ない
5)まとめた表札をクラス全体で出し合い、似たものは一つにまとめる。最後に、表札同士の関連性を考えながら黒板に張りつけ、相互の関係を矢印などで結びつける。	5)各家庭での努力不足	<ul style="list-style-type: none"> ・企業の努力不足 →「ゴミを増やす社会のあり方が問題」 リサイクル制度が不十分 →「ゴミ処理設備などの不備 →「ゴミ対策が不十分」
6)まとめた表札をクラス全体で出し合い、似たものは一つにまとめる。最後に、表札同士の関連性を考えながら黒板に張りつけ、相互の関係を矢印などで結びつける。	6)「企業や我々市民が本気でゴミを減らそうという気になっていない。また、ゴミの安全な処理やリサイクルのための基盤も不十分」	

KJ法の結果を踏まえて、ゴミの増える理由の中で最も重要と思うものを挙げさせ、その解決のためにどのような対策をとるべきか、といったテーマでレポートを書かせる。

論社刊)参照。

【ディベート】あるテーマについて賛成派と反対派、そして審判団に分かれ、一定のルールに従って討論を行い、どちらのグループがより説得力があったかで勝負を決める論争法。勝ちチームの意見「正しい意見」ということではなく、あくまでその討論において理論に矛盾がなく、説得力のある主張ができたチームが勝ちになる。論理的に物事を考える能力、効果的に意見を展開するスキルを身に付けることが期待できる。

このようなグループワークを通して、テーマに選んだ社会問題の解決すべき

ディベート	
授業の基本的な流れ	「死刑制度の是非」を考えさせる場合
1)死刑制度についての文章、資料を調べさせる。	1)死刑制度についての文章、識者の意見を読ませ、自分はどう思うか考えさせる。
2)ディベートについて説明をする。担任が議題を決める。	2)議題「死刑制度の是非」
3)クラスの中から、ディベートを行う生徒10人を立候補または指名によって選び、賛成派5人、反対派5人のグループを作る。	3)賛成派の主張「死刑制度に賛成である」、反対派の主張「死刑制度は廃止すべきだ」
4)討論に先立って、賛成派、反対派、それらのグループで、各自の意見を参考にしながら、ディベートで誰が、何を発言するかを決めていく。	4)「私たちは死刑制度に賛成(反対)である」「その理由は だから」など、主張とその論拠をまとめておく。その際に「その論拠に××というデータがある」と、その論拠を支える証拠(資料、データ)を使うより説得力が増すことを生徒に伝える。
5)ディベートに加わらない残った生徒の中から1人を議長を選び、そのほかの生徒は審判団とする。また、ディベートを行う生徒が打ち合わせを行っている間、他の生徒にも各自自分の意見を考えておくように指示したり、周りの生徒と議論をさせておく。	
6)賛成派グループによる肯定側立論を行う。賛成派の立場の正当性を主張させ、その理由を述べさせる。	6)「私たちは死刑制度に賛成です」「その理由は二つあります」「第一に凶悪犯罪を犯した人が出所した場合、再び犯罪を犯す可能性があるからです」「第二に自分の家族が殺されたとしたら、犯人が生きているのは我慢できないと考えるからです」
7)反対派グループによる否定側立論を行う。反対派の立場の正当性を主張させ、その理由を述べさせる。	7)「私たちは死刑制度は廃止すべきだと考えます」「その理由は二つあります」「第一にいくら合法でも、人間が人間の生死を決めることはできないからです」「第二に死刑が執行されて、その人が無実だったら取り返しがつかないからです」
8)相手の立論を受けて、自由討論に向けてグループ内で相手への質問を考える。相手側の説明が不足している点、矛盾のある箇所などを探しておく。また、想定される相手からの質問に対しての答えを考えておく。	8)「反対派「凶悪犯罪を再び起こすかもしれない」という理由で、人の命を奪っていいのだろうか?」、賛成派「無実の人を有罪にしてしまう間違いはそんなに頻りに起こるのだろうか?」
9)賛成派、反対派による自由討論を行う。二つのグループの全員に少なくとも1回は発言させるようにする。感情的なヤジや論理的でない掛け足取りは避けさせる。	9)「反対派「犯罪を犯す可能性は誰でもある。社会の役目はその可能性を少しでも低くすることによって、人の存在を消してしまふことではない」、賛成派「日本の裁判は十分審理を尽くして行われ、再審制度も確立している。えん罪の可能性は低い」
10)審判団に、挙手によりどちらのグループが勝ちか決めさせる。このとき、審判団の生徒に、なぜそう思ったかも発表させるとよい。	

ディベートの結果を踏まえ、死刑制度について賛成、反対どちらかの立場を選び、その理由を述べたレポートを書かせる。

課題とその課題解決方法をまとめさせていく。さらに、生徒同士のプレゼンテーションを行わせれば、他者に分かり易く意見を伝えるために、生徒は意欲的にその問題についてより深く考えたり、調べることになる。特にディベートでは、討論に勝ちたいという意識が加わるので、調べたり考えたりすることに一層熱が入る。また、それまでの学習で自分なりに考えていたことが、他者との議論を通して、「こういう考え方もあるんだな」「これもいい方法だな」と多様な価値観に気が付き、その

テーマについてのよりよい解決の方向への軌道修正が可能になる。話し合いの中でより深く考えたり、他者の意見を目を開かせるチャンスを与えたい。

5 テーマ学習と小論文との融合

分かり易く他者に伝える力、表現力を磨く

ここまで行ってきたテーマ学習について、その成果を小論文としてまとめ

させる。「1ページの不法投棄はなぜ頻発するのか、その理由と、考えられる解決方法を、明確な根拠を示しながら1200字以内で述べなさい」といったような、それまでのテーマ学習と関連した課題を与え、小論文学習とリンクさせることもできる。

さらに、環境、国際、情報、福祉といった領域から、大学入試で具体的にどのような小論文が課されているかを紹介してもよいだろう。そして、それらの中から実際に行ったテーマ学習と関連が深いものをも一つ選んで生徒に書かせてみれば、入試への意識付けと対策にもなる。

また、入試の小論文のような形式に

現代的な課題を考えさせる小論文出題例('00年度)

北海道大	複数のデータを利用しながら、高齢化社会における問題点を整理し、高齢化社会にどう取り組むべきかを論じる
京都大	科学技術に関する英文を要約し、今日のコンピュータと社会の間で生じている問題に照らし合わせて考察する
大阪大	人類の歴史と環境破壊に関する英文からキーワードを選び、筆者の論述を要約しながら自分の主張を述べる
神戸大	国際化についての文を読み、下線部の意味等を説明し、筆者の言う国際化についての自身の考えをまとめる

捕らわれず、字数の制限も行わずに

これまで学んだ知識を基に深く考えさせ、自由に論述させてみることも、思考力や表現力を鍛える有効な取り組みだろう。

6 テーマ学習と進路学習との融合

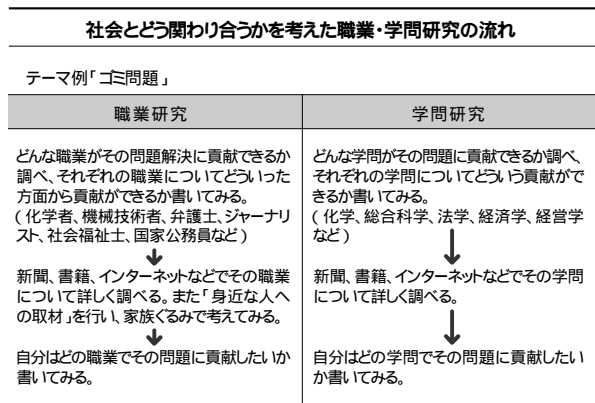
社会とどう関わり合うか考えさせることにより、進路への気付きを与える。

「ここまで生徒が研究してきたテーマについて、どんな職業、学問がその解決や発展に貢献できるか考えさせることにより、生徒の進路への気付きを与える。従来の調べ学習では、自分の興味のある職業や学問しか調べない生徒が多いようだが、ここでは、自分の興味・関心だけを基にした狭い視野ではなく、社会との関わりを意識しながら進路を考えさせることが重要だ。例えば、「遺伝子組み換え食品の安全性」がテーマの場合、職業なら化学系研究・技術者、畜産系研究・技術者、医師、マーケティング、トレーサー、チャーなど、学問なら化学、農学、生物工学、法学、経済学などがその問題解決に貢献できることを生徒

に気付かせる。

その結果、生徒はこれまで関心を抱いてはなかった分野にも目を向けるようになり、生徒の可能性をより広げることにもなる。そして、生徒の学習への目的意識を明確にし、学習へのモチベーションを高めることにもつながるはずだ。

具体的に生徒に職業や学問の身を調べさせるには、インターネットや小社「職業まるわかり事典」や「学べる大学探せる事典」などの情報誌を活用させるとよい。



7 生徒自身による学習成果の発表

取り組みへの達成感を与え、次の学習へとつなげる

「ここまで生徒の取り組みとその学習成果は、冊子など目に見える形で残したい。次への取り組みへのモチベーションアップにつながるし、何より生徒が達成感を感じることができ。またできれば、形にしたものに対して意見を言い合う場があればさらによいだろう。

従来よくある、文化祭などでクラスごとに研究成果を壁に貼るのも一つの方法であるが、意見を交わす場が少ない

オリエンテーションから始まり、成果発表に至る道筋は一例として以上のようなものと考えられる。「総合的学習」は結果を出すことだけを目的とした学習ではなく、課題解決に向かうプロセスを学んでいく学習でもあるので、そのことにも十分に配慮した指導プロセスとしたい。

1年間、あるいは1年以上じっくり時間をかけて行う場合も考えられるが、逆に、1年に二つのテーマにトライするやり方も考えられる。

「これまで生徒の取り組みとその学習成果は、冊子など目に見える形で残したい。次への取り組みへのモチベーションアップにつながるし、何より生徒が達成感を感じることができ。また、形にしたものに対して意見を言い合う場があればさらによいだろう。」

達成感の面でもやや物足りない面は否めない。実際に冊子にすれば、生徒は自分の研究成果を記録として長く残すことができるし、後日、他のグループのテーマに関心を持ったときに、そのグループの冊子を読むことで、生徒は自主的に意見交換したり、社会に対する視野をさらに広げ続けることができる。

また、ホームページ作成ツールなどを活用し、web上で校内、さらには校外に向けても発信すると、意見を交わす場が生まれてそのテーマについてさらに理解を深める機会が得られる。また、他者により分かり易く伝えるために掲載する情報の精選を行う過程で情報リテラシーの習得にもつながるだろう。